

## 転石潮間帯に生息する

### スナモグリ *Nihonotrypaea petalura* の生息環境特性と巣穴形態

\* 下田 勝政・玉置 昭夫 (長大・水産・海洋資源教育研究センター)

スナモグリ科の種の大多数は干潟を生息域としている。N. *petalura* (以下、スナモグリ)は転石潮間帯に生息するという点で特殊であり、底質特性が巣の形成に影響を及ぼすことを考慮すると、その巣穴形態も特殊であることが予想される。しかし、巣穴形態は未知であり、生態学的知見も不足している。本研究はスナモグリの生息場所の環境特性と巣穴形態を明らかにすることを目的とした。

調査地は島原半島の口之津町と天草上島の有明町の転石潮間帯である(以下、それぞれ口之津、有明)。2地域の環境特性として、海岸線に対して垂直に設置したトランセクトに沿って、高度、干出継続時間、底質粒度の特性、地下水位を測定した。巣型はポリエステル樹脂を用いて採取した。得られた巣型のうち完全なものを選び、各部位の寸法を計測した。

環境特性を測定したところ、スナモグリの生息範囲では、有明の方が急勾配であり、地表面に露出した転石(粒径64mm以上)の単位面積あたりの量は有明の方が多く、巣型採取範囲の平均地下水位(地表面からの深さ)は有明の方が深かった(口之津18mm、有明80mm)。口之津から30個、有明から28個の完全な巣型が得られた。巣穴形態の主な特徴として、(1)転石に沿って造られており複雑な形態であること、(2)開口部は1つであること、(3)巣の主要部は、個体が通過できない細い径のシャフトによって開口部と通じていること、(4)主要部は幾つかの大きな膨張部とそれらを連結する通路によって構成されていること、があげられる。2地域から得られた巣型サンプル群間で各寸法(全24測定項目)を比較した結果、開口部シャフトの「長さ」と「深さ」、排出用こぶの「長さ」にのみ有意差があり、そのほかの部位には差が見られなかった。この結果から、2地域の巣穴形態には大きな違いがないことが結論づけられた。スナモグリは干出時の乾燥から逃れるために地下水位まで巣穴を掘り下げるという予測から、地下水位の深い有明から得られた巣型は口之津で得られたものよりも深いことが予想された。しかし、2地域で得られた巣型群の巣の深さに有意差は見られず、有明からは平均地下水位より浅い巣が4個採取された。また、本種は干潟産のスナモグリ類と比較すると浅い巣を形成(巣の深さの平均値は119.4mm)することがわかった。本種巣穴は宿主の成長に伴って垂直方向ではなく水平方向に広がる(水平的広がり)の平均値は145.1mm)傾向が見られた。